
黒い猫のノワ

一条夕日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒い猫のノワ

【Nコード】

N2440H

【作者名】

一条夕日

【あらすじ】

田舎道の途中にある小さな小屋。毎晩のように猫達が集まって賑やかに騒ぐ集会場。黒猫のノワは仲がいいアリアと一緒に集会場に向かう途中、犬に襲われて怪我をしてしまいます。どうにか難を逃れたノワですが、意識を失って気がつくとき暖かい部屋の中に。そこでノワは一人の女の子と出会います。猫と人間。身近に暮らす彼らの関係を描いてみた作品です。

(前書き)

拙い文章ですが少しでも楽しんで頂ければ嬉しいです。

傷が痛い、雪が、空気が冷たい。

夜が静かなのか、僕の耳がおかしくなったのか、わからない。

痛みはこんなに感じるのに、意識だけがはつきりとしない。

裂かれた右後足がまつたく動かない。

なのにそこだけが少し温かくて、まだ血が流れているのかもしれないと思った。

オートリノの町とエペの村を繋ぐ田舎道の途中にある、小さな小屋。毎夜のように通う僕達の集会場。

仲間達がいる楽しい場所。

今夜もアリアと一緒に集会に参加しようと駆けていたのに、そこにあいつが現れた。

獰猛に瞳を輝かせ、牙を剥いた口から唸り声を上げる、僕達の天敵。そいつが雪を蹴るのと同じタイミングで僕とアリアも逃げた。

追い付かれそうになったアリアを狭い路地に逃がして、僕は広い通りを駆け抜けた。

だけど、逃げきれなかった。

あいつの足が、僕の右後足を押さえ付けて、鋭い爪で肉を抉った。痛みを声を上げながら暴れたけど、あいつの足はビクともしなかった。

このまま、殺されちゃうんじゃないかと思った。けれど、あいつは逃げていった。

近くの道を、偶然に馬車が通りかかったからだ。馬車は逃げたあいつにも、雪の中でぐったりとした僕にも目もくれず、そのまま通り過ぎていった。

助かった僕は、右後足を引き摺って仲間がいる集会場を目指した。アリアがきつと心配している。

早く彼女に僕の無事な姿を見せたかった。

気が付くと、とても暖かい場所にいた。

周りには全然雪がなくて、ふかふかとした布に身体が包まれている。パチパチと火が爆ぜる音がして振り向くと、煉瓦造りの暖炉の中で薪が燃えていた。

ここはどこだろう。

そう思つて、僕は布から這い出し、蔓を編んだ籠の中を転がるようにして跳び出した。

右後足が痛んで僕は小さく声を上げた。

見ると、僕の右後足には添え木が当てられ、上から白い包帯が巻き付いていた。

「あ、起きたのね」

近くで声がした。

声の方向に向くと、そこには子供でも、大人でもない、そんな感じの女の子がいた。

ベッドの上に座っている女の子は雪と同じ白い寝巻を着ていた。

女の子はベッドから降りると、僕に近付いてきた。

僕は逃げようとしたけど、怪我した足のせいで逃げ遅れた。

女の子の手が軽々と僕を抱えて、籠の中から拾い上げた布で身体を包んだ。

「まだ怪我してるんだから無理をしてはだめよ。大人しくしてるの」
そう言つて女の子は布に包んだ僕を籠の中に戻した。

あれから、部屋を出ていった女の子は、もう一人の人間を連れて戻ってきた。

一緒に来たのは女の子よりも少しだけ大人な女の子だった。

黒い、地味な服に白いエプロンを付けている。

「ねえ、トリエラ、私があげてみてもいいかしら？」

女の子がエプロンの女の子 トリエラに言った。

「構いませんが、あまりお手を触れないようお願いしますね」
答えたトリエラが持っていた平たい器を女の子に渡した。

女の子は頷いて器を受け取ると、その器を僕の前に差し出した。
器の中は白いミルクで満たされていた。

「さあ、遠慮なくどうぞ」

器の前にしゃがみ込んだ女の子が笑顔で言う。

僕は恐々と器に近付いて、おずおずとミルクに舌を付けた。

ミルクは温かくておいしかった。

一口舐めた後には、警戒心なんてすっかり溶けていた。

僕は夢中になってミルクを舐め続けた。

そして器一杯のミルクを舐めた僕は満腹感に満たされて籠の中に戻っていった。

女の子は空になった器をトリエラに渡した。

「舐めていただけなのにこんなに早くなくなっちゃうなんて、とてもお腹が空いていたのね」

「そうですね。でも、これからこの子はどうします？」

器を受け取ったトリエラは少し浮かない顔で聞いた。

「もちろん、私が面倒をみるわ。構わないでしょう、トリエラ？」

女の子の返事を聞いたトリエラは、少し困ったように眉を動かした。

「それは私ではなく、旦那様や奥様の許可を得ませんと」

「大丈夫、父様も母様もきつと許してくれるわ」

女の子は無邪気に答えた。

トリエラはますます困ったみたいで、小さく溜息を吐いた。

翌朝、僕は部屋の扉が開く音で目を覚ました。

薄暗い部屋の闇に紛れこんできたのはトリエラだった。

トリエラは女の子が眠っていることを確認すると、足音を忍ばせて僕に近付いてきた。

籠を持ち上げて、来たときと同じように足音を忍ばせて部屋を出ていこうとする。

何をしているんだろう。

不思議に思った僕は鳴き声を上げた。

トリエラが目丸くして驚いて、慌てて僕の口を塞いだ。

息苦しくて、僕はトリエラの手を掻い潜って籠から逃げ出した。

「ま、待ちなさいっ」

小さな声でトリエラが叫んだ。

すぐに僕を捕まえたけど、その物音で女の子が目覚ましていた。

「トリエラ、何をしているの？」

「こ、これは、その・・・」

女の子に聞かれてトリエラが気まずそうに目を逸らした。

「何をしているの？」

声を硬くした女の子がもう一度聞いた。

トリエラは観念したように俯いた。

「奥様の命令で、この猫を捨てよう・・・」

トリエラが答えると、女の子はムスツとしてベッドから降りた。

すっかり落ち込んでしまったトリエラの手から僕を奪う。

「母様の命令でもこの子を捨てることは許さないわ。トリエラ、母

様には私からもう一度話しておくから、あなたはもう下がちなさい」

「はい・・・」

女の子に怒られたトリエラは肩を落として部屋を出ていった。

何日か過ぎたあるとき、女の子が僕を抱き上げて言った。

「そうだわ、あなたに名前を付けましょう」

女の子は自分の素敵な考えに楽しそうに笑顔を浮かべた。

だけど、僕にはもうノワという名前がある。

僕は何度も訴えたけど、僕の言葉は人間には通じなかった。

「そうね・・・ナイトなんてどうかしら？」

女の子はその名前が気に入ったらしく、一度頷いた。

「お前のつやつやとした黒い毛はまるで真夜中の空のよう。お前の綺麗な金色の瞳はまるで夜空に浮かぶ満月のよう。だから、お前はナイトよ」

名付けた理由を語った女の子は少し得意気だった。

「ナイト、私はシャーロット。わかる？」

女の子　シャーロットは僕を正面に高く持ち上げて言った。

聞かれた僕は、言葉が通じないと分かっていたけど、一度鳴き声を上げた。

「よし、お前は良い子ね」

言葉が通じたはずもないのに、満足そうなシャーロットは僕を胸に抱き締めた。

指先で優しく頭の毛を撫で付けていく。

その感触が気持ちよくて、僕は小さく喉を鳴らした。

ある日、シャーロットの部屋に見たこともない男の人がやってきた。髪を後ろに撫で付けて、口元に髭を生やしている、何となく、偉そうな人だった。

シャーロットは嬉しそうに、偉そうな人に駆け寄っていった。

「お帰りなさい、父様」

「ただいま、シャーロット」

偉そうな人、シャーロットのお父さんは、駆け寄ってきたシャーロットの身体を軽々と持ち上げた。

くるりとその場で回転すると、お父さんはシャーロットを床に下ろした。

「父様、実はお願いがあるの」

「猫のことだね」

早速話を切り出したシャーロットに、お父さんが全部わかっているように言った。

シャーロットは頷いてお父さんの前を離れると、籠の中にいた僕を抱えて戻っていった。

「この子よ。足を怪我しているの」

お父さんはシャーロットの手から僕を受け取ると、高く持ち上げて僕を眺めた。

何かに納得したように頷くと、僕をシャーロットの手に返す。

「シャーロット、一つだけ約束できるかい？」

「何を約束すればいいの？」

「怪我が治って、もしもこの子が外に出たがったときには逃がしてあげること。守れるかい？」

そう言つて、お父さんは小指を立てた手をシャーロットに差し出した。

お父さんの言葉にシャーロットは深く頷いた。

「ええ、約束するわ」

答えたシャーロットも小指を立てた手をお父さんに差し出した。

二人は小指を絡めて、手を何度か上下に振った。

お昼を過ぎて、トリエラが桶と布を持つて僕に近付いてきた。

逃げようとした僕はシャーロットに抱えられた。

脇の下を抱えられると、僕がいくら暴れても逃げられなかった。

「トリエラ、丁寧だね。乱暴にしてはだめよ」

「はい」

シャーロットに念を押されたトリエラは布を水に浸して、僕の身体を拭き始めた。

冷たい水の感触に僕はびくりと身体を震わせて、また逃げ出そうと暴れた。

水に濡れるのは嫌いだ。

僕が全身ずぶ濡れになると、今度は乾いた布で僕の身体を拭いた。濡れた毛がまとまってボサボサになってしまった。

シャーロットが僕を胸に抱いて、空いた手で頭の先の毛を立てて遊んでいた。

「トリエラ、ブラシを貸して」

「はい」

トリエラはエプロンのポケットからブラシを取り出してシャーロットに渡した。

シャーロットは頭の前からお尻にかけて順番にブラシで身体を撫でていった。

ブラシの固い毛の感触が少し気持ち良かった。

別の日、シャーロットの部屋にまた男の人がやってきた。

髪が真っ白で、顔や手に少し皺がある、白いマントみたいな服を着た人だった。

この人のことは僕も知っていた。

ノーマンさん、周りの人からは先生と呼ばれている、お医者さんだ。怪我する前に僕が住んでいた場所の近くに小さな病院を持っている。時々僕に餌をくれたいい人だ。

「こんにちは、シャーロット。具合はどうだい？」

ベッドの近くに腰を下ろしたノーマン先生が聞いた。

「少し良くないかも。最近寒くなつたせいかしら？」

ベッドに座ったシャーロットが答えた。

最近のシャーロットはベッドの中にいることが多い。

ノーマン先生は黒い靴から変な道具を取り出してシャーロットの身体を調べ始めた。

「熱はないが、少し風邪気味なのかもしれないな。念のために薬を出しておくが、あまり薬に頼るのも良くない。今は安静にしておくことだ。いいね？」

「ええ、もちろんよ」

元気に答えたシャーロットにノーマン先生も満足そうに頷いた。

「あ、そうだね。ノーマン先生、もう一人診察してもらってもいいかしら？」

安静に、と言われたばかりなのに、シャーロットはベッドを抜け出して僕のところにやってきた。

僕を抱えてノーマン先生のところに戻っていく。

ノーマン先生は僕を見て、少しだけ目を丸くしていた。

もしかしたら、僕のことを覚えてくれているのかもしれない。

「足を怪我しているの。手当はしたんだけど、ちゃんと治っているのかしら？」

「どれどれ」

シャーロットから僕を受け取ったノーマン先生は僕を膝の上に載せた。

丁寧に包帯を外して、僕の右後足を診る。

少しだけ足を動かしたものだから、ちよつと痛くて僕は小さく鳴いた。

「骨は折れていないようだね。傷口も塞がってきているから、このまま面倒を見てあげれば元通り歩けるようになるよ」

診察したノーマン先生は僕の足に新しい包帯を巻いてくれた。

添え木はもう必要ないだろう、ということ以外すことになった。

ある日、知らない女の人が部屋にやってきた。

派手な服を着ていて、少し変な臭いがするおばさんだった。

「シャーロット、猫は捨てなさいと言ったでしょう」

変な臭いのおばさんは部屋に入るといきなりそう言った。

後ろに連れていたトリエラに顎の動きで何かを示す。

トリエラは困った顔のまま、僕にゆっくりと近付いてきた。

シャーロットはすぐにベッドから抜け出して、僕とトリエラの間に入った。

「父様は面倒を見てもいいと言ったわ」

トリエラが足を止めた後、シャーロットはおばさんに向かって言った。

「そんな薄汚い猫がいるからあなたの具合も悪くなったのよ。早く捨ててしまいなさい」

おばさんは不愉快そうに眉間を寄せて早口でまくしたてるように言った。

言いがかりもいいところだ。

僕も、シャーロットもムツとしていた。

「ノーマン先生はただの風邪だって言っていたわ。ナイトは悪くない」

「ナイト？」

「この子の名前よ」

答えたシャーロットが僕を抱き上げた。

シャーロットとおばさんの間でトリエラはオロオロとしている。

おばさんはしばらく僕を見た後、忌々しそうに顔を歪めて部屋を出ていった。

トリエラも慌てておばさんの後を追っていった。

あるとき、ベッドから抜け出したシャーロットは窓辺に立っていた。僕も窓枠に跳び乗って外を眺めた。

外は相変わらず寒そうで、一面に真っ白な雪が積もっていた。

シャーロットの屋敷の塀の近くでは、数人の子供達が足元の雪を集めて玉を作っては投げ合いをしていた。

楽しそうな声を上げながらどこかに走り去っていく。

子供達の声が遠退いて、部屋は静かになった。

変わらない景色を見飽きた僕は籠の中に戻ろうと振り向いた。

でも、僕が跳び降りる前に、シャーロットが僕を抱えた。

いつもよりきつく胸に抱き締められた僕は少し苦しくてシャーロットを見上げた。

シャーロットは泣いていた。
ポロポロと涙がこぼれ落ちてくる。
そういえば、僕はシャーロットが屋敷の外に出たところを見たことがない。
シャーロットは部屋から出ないで殆どベッドに潜っている。
もしかしたら、シャーロットは寂しいのかもしれない。
僕はシャーロットが泣きやむまで彼女の胸の中にいた。
なんとなく、僕は仲間達のことを思い出していた。
みんなは、アリアは元気だろうか。
そんなことを考えていると、僕も少し寂しくなっていた。

シャーロットは僕をベッドに連れ込んで一緒に寝ている。

毎朝シーツを取り替えに来るトリエラは黒い毛のついたシーツを見て顔を顰めている。

「籠に入れて近くに置くだけではダメなのでしょうか？」

困ったトリエラはこんな提案をシャーロットにしたことがある。

「だめよ。籠に入れていたらナイトを抱き締められないわ」

シーツのことはシャーロットも知っていたけど、彼女は断固として拒否した。

トリエラは溜息を吐いたけど、それ以上文句を言わなかった。

その代わり、暇を見つけては僕にブラシを掛けて抜け毛や無駄毛を取っている。

「ナイトが来てくれてからは、あなたも良く部屋に来てくれるようになったわね」

ブラシ掛けの最中、シャーロットがこんなことを言ったことがある。

「シーツに毛が付いていると奥様が不機嫌になりますので」

トリエラはちよつと顔を背けて恥ずかしそうに言った。

僕はトリエラが嘘を言っているような気がした。

トリエラも、多分シャーロットが寂しがっていることを知っている

んだ。

僕のブラシ掛けは足を運ぶ口実なんじゃないかと思った。

「ナイトが来てから、お嬢様は良く笑うようになりましたね」
お返してもするようにトリエラも言った。

でもシャーロットは全然恥ずかしがらずに笑った。

「ええ、ナイトが傍にいてくれるから、私は一人じゃないもの」
シャーロットが嬉しそうに口にして、トリエラも嬉しそうに、少しだけ微笑んだ。

だけど、僕は二人みたいに楽しい気分にはなれなかった。

シャーロットの寂しさに気付いたときに、自分の寂しさにも気付いてしまったから。

あの日から、僕は仲間やアリアのことがずっと気になっていた。
包帯の下には、もう痛みはなくなっていた。

最近、僕は窓際で外を眺めることが多くなった。

いつか見た子供達のように、仲間が近くを通るかもしれないと思ったからだ。

でも、僕が毎日外を眺めている間に、シャーロットが気付いてしまった。

「ナイト、お前は外に出たいの？」

僕を抱えたシャーロットが少しだけ寂しそうに言う。

僕は答えなかった。

だけど、視線はずっと窓の外に向いていた。

シャーロットは僕を抱く腕に少しだけ力を込めた。

理由は分かっている。

シャーロットはお父さんとの約束を守らなければならない。

そうすれば、シャーロットはまた一人になる。

トリエラもいるけど、それでもシャーロットは一人なんだ。

シャーロットはベッドの端に腰を下ろすと、僕を膝に乗せて右後足

の包帯を外した。

いつかノーマン先生がやったように、何度か動かしてみた。

僕はその間、一度も鳴かなかった。

「わかったわ、ナイト。父様との約束通り、お前を外に逃がしてあげる」

そう言ったシャーロットは、でも、と言葉を継ぎ足した。

「ナイト、今夜一晩だけは私の傍にいてちょうだい。あとは、お前の自由にしていいわ」

それからシャーロットは僕を胸に抱いたまま、ずっと離さなかった。僕も拒まなかった。

夜にはトリエラが普段より多めのミルクを器に注いでくれた。

いつもなら食事が終わってから器を取りに来るトリエラは、今日はシャーロットと一緒に僕の食事を眺めていた。

寝るときもシャーロットと一緒にだった。

だけど、今日の僕は籠の中で、シャーロットの枕元で眠った。

僕が眠るまで、シャーロットはずっと僕を見ていた。

翌朝、シャーロットはトリエラと一緒にこっそりと僕を裏口に運んだ。

シャーロットはいつもの雪のような寝巻の上からシヨールを肩にかけていた。

それでも少し寒そうで、トリエラが部屋に戻るように勧めたけど、彼女はやっぱり譲らなかった。

シャーロットは僕をトリエラに預けると、寝巻のポケットから小さな鈴を取り出した。

鈴には紐が付いていて、シャーロットは僕の首元に紐を結び付けた。紐と首周りの間にはかなり隙間があったので息苦しくはなかった。

「良く似合うわ、ナイト」

シャーロットは満足そうに褒めてくれた。

それからシャーロットはトリエラから僕を受け取った。

最後に、一度頬擦りして、僕を雪の上に下ろした。

「これでお前は自由よ。だけど、時々でいいから会いに来てくれると嬉しいわ」

さあ、行きなさい、とシャーロットは腰を上げて言った。

小さいけど温かかった手は硬く握り込まれていた。

僕はしばらくシャーロットを見上げて、背中を向けて塀の外に走っていった。

途中、シャーロットの泣き声が聞こえたけど、僕は振り返らなかった。

夜を待ち切れなかった僕は、仲間達がいる集会場に向かって駆けた。久しぶりに見た田舎道の小屋は全然変わってなくて、僕は少し安心した。

小屋の裏側にある隙間から身体を滑り込ませると、何人かの仲間がいて、僕を見て目を丸くして驚いていた。

「ノワ、無事だったのか！」
集会場のリーダーで、この小屋に住み付いているポトスが嬉しそうに叫んだ。

彼を先頭に次々と仲間が集まってくる。

みんな嬉しそうに、次々と言葉を掛けてくれた。

「うん、人間が助けてくれたんだ」

僕も嬉しくて、つい口にしたけど、その瞬間にみんなの声は止んでいた。

みんな複雑そうな顔をして、中には目を背けた猫までいた。

「みんな、どうしたのさ？」

聞いたけど、誰も答えてくれない。

リーダーであるポトスだけが、何か言いたそうに、でも何も言わずにいた。

どうしたんだろう。

僕はそう思っ、事情を教えてくださいそうな、一番仲がいいアリアの姿を探した。

でも、小屋の中にアリアの姿はなかった。

「アリアはまだ来ていないんだね」

「アリアは・・・もう来ないよ」

ポトスが、ポツリと言った。

意味がわからなくて僕が黙っていると、ポトスがもう一度、少し違う言葉を言った。

「アリアは死んだんだ」

アリアが死んだ。

信じられなかった。

でも、僕はあの夜のことを思い出していた。

凜猛な瞳、鋭い牙、僕達の天敵。

僕が助かった後、アリアがまた追われたのだとしたら・・・

「まさか・・・あいつにやられたの？」

「違うっ！」

すぐに誰かが叫んだ。

「人間だ！人間がアリアを殺したんだっ！」

続いた言葉に僕は絶句していた。

黙り込んだ僕に、後を引き継いだポトスが静かに続けた。

「人間の子供がアリアに石を投げつけたんだ。一個じゃなかった。

誰が最初に当てられるかって、競い合いながらいくつも投げつけた

んだ。捕まっ、ロープで木に繋がれていたアリアは逃げきれな

った」

「そんな・・・」

酷過ぎる。

アリアが何をしたというのか。

何かしたのだとしても、酷過ぎる。

ポトスが黙ると、小屋の中は静かになった。

誰もが同じ気持ちで、言葉を口にはしなかった。ただ、この小屋の中で、多分僕だけがみんなと違う気持ちになっていた。けれど、このときはまだその事に、僕も、誰も、気付いていなかった。気付かないまま、僕は集会場を離れていった。

次の日、僕はオートリアの町中を駆け回ってアリアの姿を探した。彼女が住み付いていた住宅街の路地裏を訪ねたけど、アリアはしばらく戻っていないみたいだった。

陽が暮れて、夜になって、集会場に行くとき、僕はようやくアリアがいなくなったことを受け入れていた。

アリアが死んだのは、僕が襲われて少ししてからのことだったと、ポトスから聞いた。だからだろう。

昨日アリアの死を知った僕と違って、集会場に集まったみんなはいつも通りの賑わいを取り戻していた。

その賑わいに加わる気になれなかった僕は集会場の端で身体を丸めていた。

「ん、ノワ、その首の飾りはどうしたんだ？」

そんな僕に気を遣って、一匹の猫が近付いてきた。

トーレというその猫は顔見知り程度で、僕とはあまり親しくはなかった。

「人間に、もらったんだ」

僕はトーレには目も向けず、投げやりに答えた。

その言葉が少なからず反感を買うことは知っていたけど、このときの僕は、そんな事に気を遣う余裕はなかった。

「なあ、ノワ、そんなもの外せよ」

不満そうに言ったトーレは、僕の鈴を結び付ける紐を爪で引っ掻い

た。

チリン、と乾いた音が首元から響いてきた。

「やめろっ！」

反射的に叫んだ僕はトーレの近くから跳び退いていた。

前傾姿勢になつて、毛を逆立てた僕は、見た目通りいきり立っていた。

トーレは驚いていたけど、すぐに僕と張り合うように前傾姿勢になつて毛を逆立てた。

「二匹ともやめないか！」

睨み合う僕達の間ポトスが割つて入った。

トーレは僕を睨んだまま威嚇の姿勢を解いたけど、僕はそのまま睨み続けていた。

「ノワ・・・」

ポトスが寂しそうに、少しだけ声を硬く呟いた。
静まり返つた集会場。

僕を寂しそうに見ているのはポトスだけじゃなかった。

僕を睨みつけているのはトーレだけじゃなかった。

集会場にいるみんながポトスか、あるいはトーレと気持ちを同じにしていた。

そしてみんなの気持ちの根っこには一つの同じ気持ちがあった。

「ノワ、それを外すんだ」

全員の気持ちを代表して、ポトスが言った。

「嫌だ。これはシャーロットからもらつた大切なものだ」

僕が答えると、トーレが再び前傾姿勢になった。

低く唸りを上げて今にも跳びかかろうとしていたけど、先にポトスが動いた。

ポトスは僕のすぐ前までやってきて座り込んだ。

身体の大きいポトスは僕を庇う壁となり、僕を威圧する壁にもなつた。

その大きな身体に気圧されたわけじゃない。

ただ、ポトスなら話せば分かってくれるんじゃないかと期待して、僕は少しだけ威嚇の姿勢を緩めた。

「ポトス、シャーロットは優しい人だよ。アリアを殺した人間達とは違うんだ」

「そんなことは関係ないんだ。ノワ、その鈴を外すんだ」

僕の期待に反してポトスの反応は硬く、冷たかった。

僕は絶句して何も喋れなかった。

身動き一つ取れなかった。

「・・・どうしてさ？」

僕がやっと絞り出した声は震えていた。

「ノワ、私だって、優しい人間がいることは知ってるよ。でもね、悪い人間だって大勢いる。そんな人間に不用意に近付いて怪我したり、死んでしまった猫はアリアの他にも大勢いる。私達が人間を嫌う理由はそれだけで充分さ。近付かなければ、アリアのような悲しい犠牲は出ない」

最初は優しい声で話し始めたポトスの声は、だんだんと低く、硬くなっていた。

僕もポトスが言いたいことはもう分かっていた。

シャーロットやトリエラ、ノーマン先生みたいに優しい人ばかりじゃない。

僕を捨てると言っていたおばさんみたいな、あるいはもっと酷い人間が世の中には大勢いる。

僕が出会った人が、たまたま優しい人だっただけなんだ。

だから逆に、たまたま悪い人に出会って僕達が傷付かないためには、初めから人間には近付かないようにするしかない。

ポトスはアリアみたいな犠牲を何度も見てきたのかもしれない。

だからこんな人気のない小屋に住み付いたのかもしれない。

きっと、ポトスは誰よりも人間を憎んでいる。

そんな気がした。

「ノワ、君がその鈴を付けていると、人間を親切な生き物だと思っ

て、不用意に近付く猫が出てくるかもしれない。犠牲が出てからじゃ遅いんだ。だから、それを外すんだ」

最後まで優しい声に戻らないまま、ポトスは言い切った。

小屋の中にいるみんなが僕の答えを待っていた。

明るく振舞っていたけど、この場にはアリアの死を忘れていた仲間は一匹としていなかった。

みんなの目が、態度が、アリアを殺した人間への憎しみを訴えている。

アリアの死を遅れて知った僕だけが、人間を憎み切れずにいた。

一番アリアの身近にいて、一番新しい憎しみを懷いたはずの僕だけが、一番人間を憎めなかった。

「ノワ、その鈴を捨てられないなら、もう私達は君とは一緒にいられない。ここから出ていってくれ」

やがて、黙って動かない僕に、ポトスがはつきりと言った。

それから僕も動けなかったけど、他のみんなが先に動いた。

誰も僕と目を合わせようとせず、背を向けて小屋の奥へと歩いていた。

それを見て僕もようやく、壁の隙間に振り向いた。

「裏切り者……」

隙間を潜り抜けるとき、僕の背後で、誰かが憎しみのこもった声で言った。

次の日、僕はもう一度アリアが住み付いていた住宅街を訪れた。

もしかしたら、と期待を持って行ったのだけど、やっぱりアリアが戻ってきた様子はなかった。

少しだけ落ち込んだ僕は、そのままシャーロットの屋敷に向かった。雪が積った広い庭に入り込んだ僕は、シャーロットの部屋の窓を見上げた。

困ったことにシャーロットは外を見ていなかった。

誰かに見つけてもらわなければ、僕は屋敷の中に入ることができない。

僕がどうにかシャーロットに見つけてもらおうと庭をウロウロしていると、屋敷の裏から誰かが駆け寄ってきた。

トリエラだった。

今日も黒い地味な服を着てエプロンを付けていたトリエラは、素早く僕を抱き上げると、屋敷の裏に戻って行った。

猫も感心するほどの素早い手際だった。

コソコソしながら屋敷の中を移動したトリエラはある部屋の扉をノックすると、返事も待たずに入ってしまった。

「トリエラ、どうしたの？」

ベッドの中から横になったままのシャーロットが不思議そうに顔を向けた。

トリエラは扉を閉めるのも忘れてベッドの脇に駆け寄った。

「お嬢様、ナイトが来ました！」

そう言っつて、拉致も同然に捕まえた僕をシャーロットに差し出した。

「まあ、来てくれたのね」

シャーロットは嬉しそうに僕に両手を差し伸ばした。

トリエラはシャーロットの手元に僕を下ろした。

僕はシーツの上を歩いてシャーロットの腕の中に潜り込んだ。

久しぶりに触れたシャーロットの手はとても温かかった。

その日の夜、やっぱりトリエラは普段より多くのミルクを器に注いでくれた。

この日もトリエラは僕が飲み終わるまで部屋にいた。

シャーロットが食べ終わるまで部屋にいた。

だって、シャーロットの食事はトリエラが食べさせていたのだから。僕がいない間に何があったのか、シャーロットはずっとベッドに寝たきりになっていた。

時々ゴホゴホと苦しそうに咳をしている。
僕は籠の中を抜け出してベッドに跳び乗った。
毛布の隙間に身体を滑り込ませて、シャーロットの隣で身体を丸めた。
すぐにシャーロットの手が僕の背中を優しく撫でてくれた。
「ありがとう、ナイト。お前は優しい子ね」
少し掠れた声でシャーロットが言った。

次の日、窓の外は真っ白になっていた。
昼間なのに、外は夜のように薄暗い。
轟々と風が唸り声を上げている。
窓がガタガタと音を立てて震えていた。
ベッドの中のシャーロットも息を荒くしていた。
眠ったまま苦しそうに熱い息を吐いている。
白い肌には汗がたくさん浮かんでいて、朝に着替えたばかりの雪のような寝巻はぐっしりと濡れていた。
トリエラがやってきて寝巻や下着を脱がせると、濡らした布で丁寧に身体を拭いて新しい寝巻と下着を着せた。
着替えを終えるとシーツや毛布も交換していた。
水と雪を入れた桶を持ってきて、そこに浸した布をシャーロットの額に乗せた。
真夜中から、トリエラはシャーロットの部屋を何度も出入りしていた。
すごく疲れた顔をしていたけど、トリエラは全然休まなかった。
トリエラがシャーロットの額の布を水で冷やし直していると、扉の向こうから聞き覚えのある声がした。
トリエラは布を絞ってシャーロットの額に乗せると、慌てて部屋の外に駆けていった。
よほど慌てていたのか、扉は完全には閉まっていなかった。

トリエラが気になった僕は扉の隙間に近付いて廊下の様子を覗いた。「申し訳ありません、ではないわ。シャーロットの具合が悪いというのに、どうして薬の残りを確認しておかないの!」

廊下では、僕を捨てると言っていた変な臭いのおばさんが甲高い声を上げていた。

おばさんの前ではトリエラがずっと頭を下げている。

「全部お前の責任よ。すぐに薬を用意しなさい」

「で、ですが、この吹雪では馬車も使えません。病院までなど、とても・・・」

「何を言ってるの! お前みたいな無能な待女の不始末でシャーロットが死んだらどうするの!」

シャーロットが死ぬ?

僕は聞き捨てならない言葉に身体を固くした。

もっと詳しいことがわからないかと耳を澄ましたけど、おばさんはトリエラを責めるばかりで、シャーロットのことさえ口にしなくなっていた。

やがて、おばさんは顔を真っ赤にしたままどこかに歩き去っていった。

トリエラはしばらく俯いたまま動かなかった。

だけど、突然振り向くと、部屋の入口で覗いていた僕にも気付かず、どこかに歩き始めた。

気になった僕はトリエラの後を追った。

トリエラは階段を下りて、廊下を早足で歩くと、ある部屋の中に入っていた。

すぐに戻ってきたトリエラはいつもの恰好の上に黒いマントを着ていた。

ここまでくると、僕にも事情が呑み込めてきた。

どうやらトリエラはシャーロットの薬を取りに行くらしい。

やっぱり僕には気付かないで、トリエラは裏口の方に歩いていく。

そして裏口の扉の前で息を飲んで、慎重に扉を開いた。

その瞬間に、トリエラは風に押されて勢いよく開いた扉と一緒に外に引つ張り出された。

悲鳴を上げて雪の中に転んだトリエラ。

とてもじゃないけど、ここから病院まで辿りつけるとは思えなかった。

でも、もしもあのおばさんの言う通りだとしたら、薬がないとシャーロットが危ない。

トリエラじゃ無理でも、僕ならこんな吹雪の中でも病院まで行けるはず。

ノーマン先生なら、きつと僕に気付いてくれるはず。

だったら僕が行くしかない。

僕がシャーロットを助けるんだ。

ようやく体を起こしたトリエラが、扉を閉めようと振り返って、僕と目が合った。

「な、ナイトっ？」

トリエラは何か言おうとしていたけれど、それを聞く暇なんて僕にはない。

僕は吹雪の中に飛び出した。

なるべく狭い路地を通って吹雪を避けた僕はノーマン先生の病院の前に辿り着いた。

明かりはついていてるけど、どこにも僕が入り込めそうな隙間がない。だけどノーマン先生は窓から見える場所にいて、机に向かって白い湯気を立てる温かそうな飲み物を飲んでた。

僕は窓に向かって跳び跳ねると硝子に体当たりした。

風で揺れるのとは違う、ちよつと激しい音がした。

だけど僕の身体はすぐに地面に落ちて、ノーマン先生が気付いたかどうかかわらなかった。

もう一度跳んで体当たりする。

気付かなかつたら、また跳んで体当たりする。

何度も繰り返し返していると、少し身体が痛くなってきた。

身体が凍えて、もうどれくらい跳んだのかわからない。

そう思い始めた頃、窓の前にノーマン先生が現れた。

僕を見つけて目を丸くして驚いている。

窓際を離れたノーマン先生はすぐに病院から出てきて僕を抱き上げた。

寒さに身を震わせながら急いで病院の中に逃げ込んでいく。

「ふう、寒かった。お前さんはこんな吹雪の中で何をしていたんだ？」

玄関で僕を下ろしたノーマン先生は身体に積った雪を払いながら言った。

僕は薬がほしいと訴えたけど、ノーマン先生には言葉が通じない。

寒かっただろう、と言いながらノーマン先生は僕を抱きかかえて病院の奥に戻っていく。

こんなことをしている場合じゃないのに。

部屋に戻ったノーマン先生は床に僕を下ろすと、机に向かってまた飲み物を飲み始めた。

どうにかしなくちゃいけない。

でも薬がある場所なんて僕にはわからない。

だったらノーマン先生をシャーロットの屋敷まで連れていくしかない。

そう考えた僕はノーマン先生のズボンの裾を噛んで引つ張った。

「ここらこら、悪戯はいかんぞ」

カップを机に置いたノーマン先生が僕をズボンから引き離した。

何度か繰り返し返したけど、ノーマン先生はまったく気付いてくれない。何か別の方法を考えないと。

そう思っつて部屋の中をキョロキョロしていると、黒い鞆が目についた。

以前シャーロットの身体を調べたときに、変な道具を取り出した鞆

だった。

あれなら気付いてくれるかもしれない。

僕は鞆の持ち手に噛み付くと、グイグイと部屋の外に引っ張り始めた。

「むう、今日はどうしたというんだ？」

僕に気付いたノーマン先生が不思議そうにしながら鞆を元の場所に戻した。

だけど、戻した場所で足を止めて、顎に手を当てながら何かを考え込み始めた。

そして少し険しい顔になって僕の前にしゃがみ込んだ。

「もしかして、シャーロットお嬢さんに何かあったのか？」

やっと分かってくれた。

僕は一声鳴いてノーマン先生の言葉が正しいことを訴えた。

「ふむ・・・確かに最近のシャーロットお嬢さんの体調はあまり良くないみたいだったが・・・いや、まさか・・・」

鳴き声を聞いたノーマン先生はまた顎に手を当てて考え込み始めた。焦れた僕はノーマン先生のズボンの裾を噛んで引っ張った。

「わかった、わかったから、そう急かさんでくれ」

ノーマン先生は困ったように言って窓の外に目を向けた。

少し考えた後、机で紙に何かを書いて、小さな革の袋に入れた。

戸棚から小さな紙片を取り出して、それも革の袋に入れた。

「よし、お前さんに一つお使いを頼もう。この袋の中には私の手紙とシャーロットお嬢さんの薬が入っている。これをトリエラのところ、いや、この際だからシャーロットお嬢さんの屋敷の誰かでもいいから届けておくれ」

説明しながらノーマン先生は革の袋を僕の背中に縛り付けた。

僕を抱えて玄関に移動すると、扉の前で僕を下ろした。

少し心配そうに僕を見下ろして扉を開く。

開き切るのも待ち遠しかった僕は隙間から抜け出した。

「私もすぐに後を追うが、この吹雪では時間が掛かる。頼んだぞお

！
遠ざかる僕に、吹雪の唸り声に負けない大声でノーマン先生が叫んだ。

後は屋敷に戻れば、きっとトリエラが僕を見つけてくれる。

ノーマン先生は袋の中に薬を入れたって言っていた。

これでシャーロットは助かる。

僕は少しでも早くシャーロットを助けたくて、狭い路地を通るのをやめた。

路地は風が弱いけど、シャーロットの屋敷に戻るには遠回りになるからだ。

おかげで病院に行くときよりも随分早くシャーロットの屋敷に近付くことができた。

けれど、そのとき僕は吹雪の向こう側に、何か黒い影を見て思わず足を止めた。

目を凝らして、その姿を捉える。

僕の前に立ちはだかっていたのは、僕の右後足を抉った天敵だった。どうしてこんなときに。

遠回りでも路地を通っていたらと後悔した。

もう、あいつも僕の姿を見つけて、牙を剥いていた。

風の音で聞こえないけど、口からは唸り声を上げているに違いない。

ここにはあいつを振り切れるような狭い路地はなかった。

後ろに戻るか、前に進むか、どちらかしかない。

どちらにするか、今までの僕なら迷わず決めていた。

だけど今の僕は迷っていた。

一步、僕の恐れが足を後退させた。

そのとき、チリン、と首元から乾いた音が聞こえた。

ああ、まったく、どうしてこういうときに限ってこんなに天気が悪いのか。

昔から運がいい人間じゃなかったけど、お嬢様の具合が悪いときにまでこんなに運がないなんて、不幸過ぎて涙が出そうだった。

お嬢様まで私の不運に巻き込んで情けなかった。

もしかしたら涙は出たのかもしれない。

だけどそんなものは風で飛ばされたか、寒さに凍り付いたか、とにかく私の頬を伝うことはない。

私の薄っぺらいマントなんてあってもなくても変わらないくらいに外は寒い。

飛び出していったナイトは大丈夫だろうか。

猫は全身を毛に覆われているから、もしかすると案外平気なのかもしれない。

というより、平気でいてほしい。

あの子がいなくなると、またお嬢様が寂しそうにしてしまう。

笑ってくれなくなる。

あの子じゃないとだめなのだ。

そんなことを考えて寒さを紛らせながら向かい風に立ち向かっていると、不意に吹雪の中から黒い物が飛び出してきた。

黒い物　　全身黒尽くめの犬は左前足を引き摺るようにしてどこかに走り去っていった。

こんな吹雪の中をウロウロしていたので怪我でもしたのかもしれない。

ナイトは大丈夫だろうか。

彼の安否を気にしつつ、更に前に進むと、雪の中に黒い物が落ちていた。

近付いてみると、赤い物が周りに飛び散っている。

もつと近付いてみると、黒いのは猫のようだった。
まさかと思つて、もつと近付く。
その猫は、首に鈴を付けていて、背中に革の袋を背負っていた。

*

気が付くと、耳障りな甲高い声が聞こえた。

目線を動かすと、霞んだ視界で変な臭いのおばさんがこれ以上ないほど顔を赤くして声を荒げていた。

「この役立たず！シャーロットの面倒も見ないで、そんな薄汚い猫を拾ってくるなんて、役立たずにも程があるわ！」

「奥様、それは違います！ナイトがお嬢様の薬を持ってきてくれたのです。この子はお嬢様の恩人です！」

別の声が、トリエラの声が僕の上から聞こえた。

今までおばさんの前では大人しくしていたトリエラが、信じられないくらいに声を荒げていた。

ただおばさんはトリエラを馬鹿にするように鼻で笑った。

「ふん、どうせ猫を飼う口実を作るために、最初から薬を隠していたのでしょう」

「違います！」

トリエラは、僕が持ってきた革の袋からノーマン先生の手紙を取り出しておばさんに突き付けた。

「ノーマン先生の手紙です。薄汚い猫や役立たずの侍女は紙もインクも持ちません。間違はなく、この子がノーマン先生から薬を預かってきたんです！」

すごい剣幕で叫ぶトリエラを前に、おばさんは忌々しそくに顔を歪めた。

「ふ、ふん、そんなことどうだっていいわ。早く薄汚い猫は捨てて、

シャーロットの看病に戻りなさい！」

自分の言い分だけを吐き捨てたおばさんは逃げるように去っていった。

フンツ、とトリエラが満足そうに鼻を鳴らした。

「待つてなさい、ナイト。すぐに手当てしてあげるから」

トリエラは飛ぶような速さで廊下を駆けると、薄暗い部屋の中に僕を連れ込んだ。

マントを床に放り捨てると、ベッドからシーツを剥ぎ取って僕の身体に乗せた。

「確か・・・まだ余っていたはず・・・」

ベッドの下に頭を突っ込んだトリエラはもぞもぞと動いて、小さな箱を持って出てきた。

箱の中には包帯や綿が詰まっていた。

僕が後右足を怪我したときに手当てをしてくれたのはトリエラだったみたいだ。

手際よく傷口を消毒して包帯を巻いてくれる。

手当てをしている間にもトリエラは何かを話していたけど、僕には何を話しているのか聞き取れなくなってきた。

霞んでいた視界が余計に霞んでいく。

屋敷の中にいるのに、外にいるときみたいに身体が冷たかった。

何となく、僕は右後足を挟まれて、屋敷で目を覚ました時のことを思い出していた。

ふかふかの布、パチパチと火が爆ぜる暖炉、僕を抱えたシャーロットの手。

また僕はあの温かい手に触れることができるだろうか。

触れることができればいいな。

うん、また触りたい。

ううん、触ってほしい。

お嬢様に薬を飲ませた後、今日だけで四度目になる着替えをした。着替えを終えた後にはシーツも交換した。

前に用意しておいた桶の中身はすっかりぬるくなっていたので、新しく雪を放りこんで冷やした。

冷たくなった水に布を浸して絞ると、お嬢様の額に乗せた。

気のせいかもしれないけど、ナイトが持ってきた薬のおかげで少しだけ熱が引いたような気がした。

もちろんこんな早く薬が効くはずもない。

だから私の気のせいに違いない。

お嬢様の世話を一区切りつけた私は、ナイトの寝床になっている籠を持って、急いで自室に駆けていった。

私の部屋には暖炉がない。

シーツとマントで身体を包んでおいたけど、あんな場所では身体に良くない。

手当てもしないままお嬢様の部屋に連れ込むわけにはいかなかったけど、今なら問題ないはず。

私は早くナイトを暖かい部屋に移動させようと、勢いよく自室の扉を開いた。

ナイトを寝かせているベッドに近付こうとしたとき、足元で乾いた音がした。

思わず足を止めて床を見下ろすと、小さな鈴が落ちていた。

ナイトが付けていた鈴だ。

どうやら途中で紐が切れて落としてしまっていたらしい。

雪の中に落とさなくて良かった。

私は鈴を拾うと、ナイトの寝床である籠の中に入れた。

改めてベッドに近付いて、ナイトを籠に入れようと、彼の身体に触れた。

だけど、私は驚きに手を止めてしまった。
ナイトの身体は冷たく冷え切っていて、ピクリとも動かなかった。

*

相変わらず外の世界は近くて遠いけど、春らしい暖かさは私の部屋も満たしてくれる。

すっかり雪が溶け切った窓の外には芝生や土の色が目立つようになった。

あれだけあった冬の白はもう、外には残っていない。

体調を崩しやすい冬は嫌いだったけど、今では少しだけ待ち遠しいあの真つ白な景色の中なら、真つ黒なナイトの姿をすぐに見つけることができるから。

一晩だけ戻ってきてくれたナイトは、あれから私の前に姿を見せてくれない。

私が寝込んでいる間に出て行ってしまったのがとても残念でならなかった。

だから、体調が良くなってから、私が窓の外を眺める時間は増えた。またナイトに会いたい。

そう願って私は今日も窓の外を眺めていた。

でも、どれだけ待ってもナイトが庭を訪れることはない。

今日もだめかしら。

少し諦めかけていると、門から黒い物が近付いてきた。

ヒョコヒョコと尻尾を揺らしながら庭に入ってきたのは黒い猫だった。

もしかして、ナイトかしら。

そう思うとじつとはしていらなかった。

部屋を飛び出した私は玄関から庭に出て、黒い猫の姿を探した。

すると、猫とは違う、黒い衣装の女の子が庭にしゃがみ込んでいるのを見つけた。

トリエラだった。

「トリエラ、今ここにナイトがいなかったかしら？」

呼びかけると、トリエラは立ち上がって私に振り向いた。

腕の中にはさつき見た黒い猫が抱かれている。

その首には私がプレゼントした小さな鈴があった。

「久しぶりに、来てくれましたよ」

トリエラが私に近付いて、猫を差し出してくれた。

私は受け取って、久しぶりに猫の身体を抱き締めた。

「ちよつと大きくなったのかしら？」

なんだか以前とは少し違う気がした。

両手で目の前に持ち上げてみる。

真夜中の空のように黒いつやつやとした毛。

夜空に浮かぶ満月のような金色の瞳。

ナイトのはずなのに、私が知っているナイトとは何かがちよつと違う。

そんな気がした。

「お嬢様、ナイトだってまだ子供だったのですから、しばらく会わなければ大きくなりますよ」

すっかりナイトを気に入ってしまったらしいトリエラが笑顔で言う。

トリエラが言った後にも私はしばらく持ち上げた猫を見つめていた。

「・・・それもそうね。ナイトだって変わるわよね」

ナイトとの再会は本当に久しぶりのことで、別の猫なのかもしれないと疑ってしまった。

しばらく会わない間にこんなに成長した。

その変化に気付いてあげられなかったことがちよつと申し訳なくて、

私はナイトを抱き締めた。

「トリエラ、早速ミルクを用意してちょうだい」

「はい、いつもより多めに、ですね」

頷いてトリエラは裏口に駆けていった。

私も玄関から屋敷の中に戻っていく。

「ねえ、ナイト。今度あなたが屋敷を出るときは、私にも見送りさせてほしいわ。私が眠っている間は私の傍にいてちょうだい。お願いね？」

私がナイトに言っておきたかった、唯一の不満。

ナイトは金色の丸い瞳で私を見つめて、小さく一声鳴いた。

(後書き)

こんにちは、一条夕日です。

猫の視点から人間を見るとどんな感じなのか、そんなことを考えて作った作品です。

ノワとシャーロットの関係。

アリアと、彼女を殺した子供達の関係。

どちらが多いとは言えませんが、どちらもこの世界のどこかにある関係だと思っています。

譲れない理由で傷つけてしまうこともあれば、理由とも言えない理由で傷つけてしまうこともあります。

時々でいいから、目を通してくださった方々が人間としての立場ではなく、彼らの立場で思いを巡らせる機会を作って頂ければ、私としてはとても嬉しいです。

良ければ次回もお目通り頂けることを願っています。
拙い文章ですが、目を通して頂いてありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2440h/>

黒い猫のノワ

2010年10月9日11時42分発行